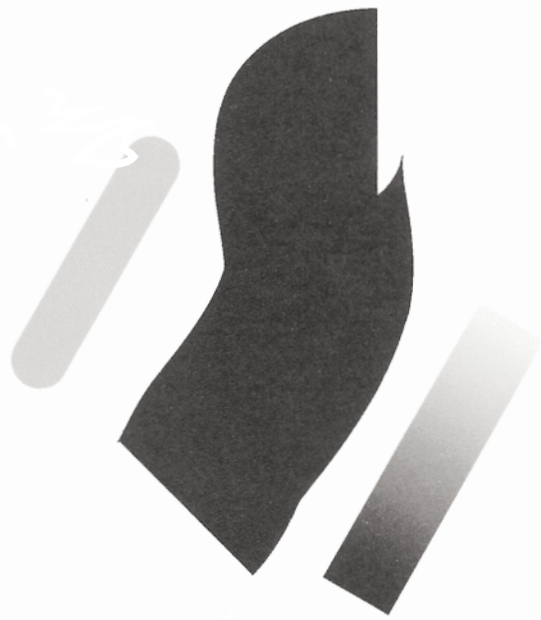

月 刊

Mélange

VOL.72



2012.06.17

詩・掌編小説・エッセイ

月刊『Mélange』 VOL.72

2012/06/17

月刊めらめら編集部

◆ダンゴムシ

中嶋 康雄

キッチンの片隅
コロコロとした黒い球体
なにかの糞だと思つて
割り箸でつまもうとすると
割れた
ワラワラ
足が出た
ワラワラワラワラ
いずこからともなく
空気の隙間からも
現れ出で
行列
割り箸伝い走り登る
手から腕
腕から胸、鎖骨の谷
首、顎
そして
無数
ワラワラ
ワラワラ
走り出る
ワラワラ
ワラワラ
ワラワラ
ボクの顔

はいのぼる
ワラワラ
ワラワラ
ワラワラ
ボクの暗い場所求めて
鼻の中
いくら
鼻かんでも
いくら
鼻ほじつても
出てこない
鼻捻り絞つても
出てこない
出る
鼻血
ワラワラワラワラ
集い
飲む
目の中
いくら
目こすつても
出てこない
目玉えぐり取つても
出てこない
落ちた
目玉
ワラワラワラワラ
集い
食む
口の中
尻の中
臍の中
穴という穴

一杯になると
小さいやつが
汗の穴に押し入ろうと
皮膚の表面で
もがき始める
もがき続けるうちに
こつをヒョッコリつかんで
皮膚の中に
スルリ
もぐりこむ
ボクの血管の中
ワラワラワラワラ
走り出す
心臓
集結するダンゴムシに
ワラワラ食べ尽くされた
空いた場所は
ダンゴムシの巣
ボクを
ダンゴムシが
わらわら
わらわら
出たり入ったりする
夜
たくさん出る
昼
たくさん入る
一日中
わらわら
わらわら
出たり入ったり
雨

たくさん出る
晴
たくさん入る
暑い
たくさん出る
寒い
たくさん入る
楽しい
たくさん出る
悲しい
たくさん入る
歩く
土
たくさん出る
アスファルト
たくさん入る
空気と
同じ
出たり
入ったり
わらわら
わらわら
体の外も内も
ダンゴムシだらけ
交尾しまわる
産卵しまわる
ボクハ
ダンゴムシのためにのみ
生キル

◆ヘルメスの贈り物

岩脇リーベル豊美

かつて透ける季節に届いた
H i r i s という名の花の香が漂う
十とせを過ぎても
時間の層に幾重もの弧を描いている
水際に繞む虹彩
余酔の白昼のありのまま
しなやかなその葉がねで
わたしの肉を削いでくれますか

早朝に生まれ
もつとも美しい時刻に檻樓ける
靈魂の案内者よ
歪む時空をうち過ぎて
観念に遊ぶ血色が稀有な青紫に染まる

いま雑踏の真中で滑稽だけれど
君よ、鋼鉄を持つているか
わたしはこの荷札を切り落としたいのです

◆生きかえる

川田あひる

純白の
フリルのドレスから
姉の死した首が
立っている
母や
さまざまな人が
ドレスの中に
紙幣を入れていく
そして祈る
亡き父もいる
わたしの息子たちも対面し
祈る
姉は
横たわっていない
羽化直前の姉に出会っているのだ
全力で
祈り

わたしは
嗚咽し
転げ落ちた
が、
見た
生きかえる姉を
美しい
七五三詣りの無垢な表情
つぶらな瞳
穏やかな人生航路が約束された
よろこび
人は静かにじつと
見守っていてくださった
姉はドレスをつまみ
踏み出し
一札する
その厳粛な道のりを
忘れない。

絵：野口つよし

詩：高谷和幸



「雲」が好きだ
ガスレンジの青い炎がどこかの文化人類学者なら、
墓場より正体のないの水を研究するだろう。
雲のほうが創造的だからね。
あさの10時の炊事場は
出来立ての「雲」だから好きだよ。
電子が反射して、
楕円軌道のやりすぎで
テーブルにぶつかり、
それで食器や窓にぶつかって
「雲たち」をいっぱい残している。

◆六時四十一分の勅令

千田草介

ぼくは天皇なのだ。なぜならばぼくが天皇ではないことを証明することがぼくには不可能だからだ。だからぼくが天皇であることは自明の理なのであり、ぼくは神聖ニシテ侵スヘカラス存在なのであって、その畏きことを汝臣民ら憲法第三條をよく読んで思い知るがいい。ぼくは賢いから万世一系の天皇、御先祖様たちの名前を全部そらんじている。侍従たちに天皇名の名札をつけさせているんだ。みんなは畏れ多いとしりごみするが、ぼくは天皇だから勅命をくだして辞退をゆるさない。侍従たちはぼくほど賢くないからなかなか天皇の名前がおぼえられないんだが、そうすれば彼らにもたやすく記憶させられる。すくなくとも自分のつけた名札はすぐにおぼえられるからね。どうだ名案だろう。神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化・崇神・垂仁・景行、ここまで一ダースだな。天皇は全部で十ダースちよつと。ちよつとつてのは半端な北朝の天皇とか、明治になってから歴代に加えられたのとか、即位しなかったのに天皇あつかいされているのとかだ。ほんとにアバウトだね皇統は。どこをどう見て万世一系というのか天皇であるぼくにもじつのところよくわからない。そうそう、神武天皇より前のウガヤフキアエズノミコト、ヒコホホデミノミコト、ニニギノミコト、アメノオシホミノミコト、アマテラスオオミカミ、イザナギ、イザナミノミコトは、さすがにぼくにも畏れ多いのでお社に齋きたてまつつてご覧いただく。何を見てもらうかというところ、一ダースごとの天皇小隊を十隊編成して軍事演習をするのだ。ひらたくいえば戦争ごっこ。なぜつて、ぼくは陸海軍を統帥しなくてはならないからね。各隊に日の丸の軍旗をもたせる。考証違反になるけどね。だつてね、神武から孝明まで二一代プラス半端者はみんな日の丸なんて見たことがないからね。君が代を聴いたこともない。明治からだよ。なんで日の丸がわが日の本トヨアシハラミズボノクニの旗なのかね。ほとんどの天皇は知らないんだ。でも日の丸を使わないと皇軍にならないから、みなには不満があるうと我慢いただく。演習とつたつて実戦さながらだ。だから後深草天皇を頭とする深草十二帝陵隊のように枕をならべて討ち死にすることもある。もつとも、もつともとつくのむかしに死んでるんだから、どんなことになろうがぼくには道義的責任はない。天皇陵にお帰りいただくだけのことだ。神聖不可侵にして生きている天皇はぼくだけなのだ。御名御璽。

◆背面

大橋愛由等

すべては〈暗黒電灯器〉のせいだとわかっていたので自らの背面をなべて暗黒にするよう設定してカーサクを出て駅に向かうのだが駅は含羞のさなかにあつて地下に籠つてしまひ闇の只中にあつては闇を作れないことの寂然を痛感してあえぎながら通路を歩いていると「わたしは川だ」と自傷を続ける男がしゃがんでいて「わたしは奪われた」と語り続け「わたしは全体だった」となにやら暗渠となつてしまつた川の運命を呪ひ続けているようなのだがよく見ると何人かの川が同じ独言を吐いていてこの者たちに暗黒をつくる〈暗黒電灯器〉を見せると袋叩きにあうだろうと怖れをいただき「紫陽花は恩寵である」と慰勞の言葉を発すると「わたしたちはもう忘れられている」と応え川同士でなにやら子音ばかり発語しあつていてそれは夏の川面をそよぐ風の言葉であるらしく口をすぼめて再現しあつている様相を横目で見て立ち去ろうとすると「海もやはりいつだつて暗黒なのか」「土手に咲いていた浜木綿の香りにもういちど嫉妬したい」と口ごもりながら地下世界を歩き続けていたのである。

二六時になつた時に「出発する」と駅員のアナウンスが聞こえ最終電車と勘違いして乗り込んだ列車に搭載されていたのは〈街〉であり列車の幅なので書割りのような狭い敷地なのだが間違ひなく〈街〉

そのものを載せて走りだしそれは駅前にある飲み屋街めぐりにいて既視感があるのだがなぜ〈街〉が列車そのものになつて移動しているのかわからないままその意味を聞き手が不在であるにもかかわらず説明しはじめその〈街〉は終電車が到着する時間が早く零時をすぎると頃には人通りが途絶え飲食店も閉まり無人地帯になつてしまつたために深夜に発車しても〈街〉の住人たちは熟睡して移動には気がついていないのだからと推測しながらでは〈街〉を搭載した列車はどこに向かうのだろうかと思いを馳せると〈街〉はいつも朝には同じ駅前存在しつづけるから早朝に戻つてくるため鉄路を巡回しているのかどこかに潜んでいるのかもしれないと考えてみても〈街〉が移動することは住民も酔人も知らず知つているのは鉄道会社の社員たちだけで社員にしてもなぜ〈街〉を移動させるのかその理由を知らないままに毎日の仕事としてこなしているのだ。

背面を暗黒に設定したままだったので〈街〉を登載した列車がどこを移動したのか分からなかったが終始欠け始めた月が追尾し注視していたことは確かで無化されてしまつた〈非場〉は魔術的リアリズムの語法の中で物象と倫理が相克しながらも立ち上がつてきては消えていたのだが夜明けになつていまだ地下に籠つたままの駅で川たちの行方を捜したのだけれど見あたらず〈暗黒電灯器〉が逆相したために彼らを消却してまつたのだろうかいやひよつとして彼らは〈街〉に巢食う酔客にすぎず夜な夜な二六時発列車を待つているのだけではないのかと示唆したのは成唯識論を一心に突付いていた一番鶏であつたのである。

◆真綿の光球は壊れ、内言のこうもりへ

有時秀記

やわらかな真綿でできた球体は誕生以来、真綿のような乳白色のおだやかな光をはなち、心身空間アルファをあまねく満たしている。雨がアルファに降りそそぎ、暴風がアルファを打ちたたたく日々も光球の光は、静かにアルファを照らし、なにごとにも耐える柔軟性とはがねのような弾性をアルファ自身の内なる空にもたらしている。アルファが胚胎するナノミクロンの種は星と陽に照らされ、庭にうるわしい花々を咲かせる。庭に咲く花はおまえである。庭に咲く花はわたしである。おまえであり、わたしである庭の花は庭の存在によって、星と陽によって、恵によって、成就を咲かせる。

頭上の空がにわかになくなくなり、遠方で得体の知れない鉄石が激しく落ちた日に、アルファは、落石の、その現象を超えて何もでもない何ごとかによってつまずき、どこにもない何ごとかによって、地にひれ伏す。打ちくだかれたアルファの両の眼は、光を失い、溶けおちたアルファの身体はえんえんと痛みつづけるだろう。盲目に転落したアルファは、オイディプス的なアンチオイディプスであり光球の崩壊は内在律を破壊し、闇をあふれさせる。

砕かれた内在律は歴史の停止であり、アウシュヴィッツのホロコーストに共振する。「神は死んだ」と言った哲人の言葉そのままに

闇の庭に咲いた、わたしでありあなたである花は、その闇が深まり、漆黒の世界となった時刻に枯れ果てる。枯れ果てた枯れ花が、漆黒の闇の中に死し、非在し、かつは死を存在する。

漆黒の中にもしかし、ナノミクロンの種の起源は、アウシュヴィッツの歴史の停止を超越しようとする。超越のDNAは、何ごとかでありうる何ものかをいずこかに見えうる何ごとかを、その二重らせん構造の中に忍びこませている。

らせんの構えは、死んだ神に代わる言葉を生み出そうと要請された魔のようなベータ、ガンマを自ら創りだそうとするだろう。数百年のあいだ解かれなかった難問を解くように

二進法が仮想世界をたえず変えていこうとするようにデュシヤンが超然たる作品を大ガラスで被い可視化するように名づけえぬものをカバン語で名づけようと試みるようにゴドーを待てないゴドーを待つようにちつぽけな人体が宇宙の大きさであろうとするようにカリプソの海がアポカリプスになるように五劫を経るような寿限無のようにエスプレッソがネスプレッソになるように「かのよう」に自動機械は回りつづける。

そうした暁、ロゴスは世界の底を打ち割って、たぐい稀なる言葉を連れてくるだろうと、らせん形の階段を登りながら、わたしというあなたと、あなたというわたしは、つ・ぶ・や・く。ツイッターを使わないで、沈黙しながらの内言語として、つ・ぶ・や・く。ことりと音も立てずに、小鳥ではないこうもりは暁を飛ぶ。かく、無音で、つ・ぶ・や・きながら。

◆マッドキャットは眠らない

チユン・グンサム

おそらく生まれつきナイーブな作りなのだ。本来的に無邪気、長じてもなにかにつけ付きまとう幼さは、彼の仕草や他人への反応や、ふと睫毛を伏せた時に周囲の者たちを困惑させてしまうような弱々しい翳りが、そのような印象を与えてしまっているのだろう。

朝の目覚めは経験値として測れず、日々は長い区切りの連続線にすぎない。よって新しい朝は彼には訪れない。或いは目覚めようのない悪夢を生き続けているのかも知れないが、ここでは触れないでおこう。こうして叙述していても彼の内面のありようは何ひとつ明らかにはならない。この本質の語れなさが彼マッドキャットの眠れない原因の一つでもある。

最初に気付いたのは母親であった。彼をこの世に産みおとした分娩台の上で迎えるというのは本当のことだ。赤児の面相の猫か蛙かどちらにも似て非なる、いつたいにあらゆる表出を端から否定して、とめどなく美しくも醜怪な肉体。「気が違ってるわ」。

すべての母が母性に目覚めるわけではない。彼女は自分の子供の本性、いわゆる彼の情動の成り立つ所以への一切の関心を放棄したのだった。

「あなたには物事の本質はわからない」。ことあるごとに彼に向って矢のように放たれる一言、しかしただの一矢も彼の頭部を射ることは無く、黙って視線を宙に浮かせ、肩をゆすってみせる。ある時は顔を撫で、またある時は喉を膨らませ不満を露わにする。彼には母親の発言の字面を追うこと、あらゆる事象の表面をなぞるだけで、感得できる道理を自明とすることができた。ドリンコート城の主は痛風だし、イジドル・ポートルレとアルセーナは同性愛かもしれないとか、関係性の連続は狡猾に彼を翻弄するのだ。

横書きの私小説は字面を追うと素通りしてしまうが、縦書きに書きなおすと行と字間の隙間がくつきりと現れ、さも余白こそが読まれるに値する内容という「詩」のようなものが出現するのだ。これは私たちの言語形態の特質であるが、彼のような本質を問われ続けなければ存在自体が危うい人間には不幸なことだった。縦書きの小説はすべて猥褻だ。余白は眠りを強要するから苦痛だ。起立する発話。私小説は彼自身である。マッドママ、マッドフロッグ。

赤毛のにんじんは他人とは思えない。口を描かない挿絵はついでに眉も髪の毛も無い。なのに赤毛のにんじんと家族に渾名される。ある日ににんじんは母親を井戸に落とすのだ。マッドママ、マッドキャット。

◆ゴーレム(九十九句)

富哲世

千年に一度だけやねトマト坊や
誰もラッパを吹かぬ街トマト坊や
虎よりもケチャップが好きトマト坊や
左手でにしぎのあきらトマト坊や
坊やが坊やで坊やより風信子トマト坊や
そしてまたチーズケーキに生まれ変わるよト
マト坊や

いつまでも祝儀袋よ永遠にトマト坊や
母逝きて南南西の乳首かなトマト坊や
いつまでもマストの上の隠れ鬼トマト坊や
やちまたに蟋蟀の鳴くトマト坊や
最後のタバコに火を着けるととき夜汽車泣くト
マト坊や

右目の少女春の段差に躓けるトマト坊や
鏡の間で立ち止まるふりトマト坊や
絵の外の街に興行きあるようなトマト坊や
鏡の後ろの瓜二つの部屋トマト坊や
ゴーレムを探しに街の古具屋へトマト坊や
てんあんもんでんあんもんとトマト坊や
でんでんむしむしかたつむりトマト坊や
よく燃える骨を訪ねて豆腐屋へトマト坊や
お供えの饅頭光る海のごとトマト坊や
ぶりんぶりんと賤しき現前トマト坊や
窓下に糞まる犬のまろい息トマト坊や
窓外の地虫をマネてトマト坊や
牛魔王の兎に牛蒡に河童に草いきれに絶えし
城トマト坊や

鴨の宿りを訪ねるトマト坊や星の王子様から
来た一枚の手紙の端に一粒の草の実がくっ
ついているの知らないトマト坊や
噴水の翳りの昼やトマト坊や
夕映えが降りてくる街トマト坊や
きのうの夕日が今も空を染め上げてトマト坊や
哀調や今日も襖の上に影トマト坊や

をんなターザン朝に道掃くトマト坊や
みつつまで数えて嬉しトマト坊や
どこまでもち近づいて来る岩のありトマト坊や
遠く見てつながつている犬の首トマト坊や
言えないこと言われて思わず死んだふりトマト坊や
倉庫には入らざるべし薄荷飴トマト坊や
手羽先を食べてはくしよん大魔王トマト坊や
六畳の鏡の奥の孔雀かなトマト坊や
まあまあまあ、なんだよとトマト坊や
ここはまだ姐さんの領トマト坊や
ウナギのウの口をして立ち止まるトマト坊や
いうならば不死鳥のごと蒼しトマト坊や
「佐世保の空の小悪魔2号」とトマト坊や
子のためにおかんの鐘打つ雨の塔トマト坊や
みつつまでまだふたつあるトマト坊や
しゆくしゆく雨降りやまぬいも畑トマト坊や
緑夜に首を抱えてさ迷えるトマト坊や
幸せをきつと見つける街、のトマト坊や
空映す水の青さやトマト坊や

中華街この世の値段は如何ほどにトマト坊や
草刈まさお東にうつすら昼と月トマト坊や
部屋の中しかめつ面をやってみるトマト坊や
ふつとまた梯の居てトマト坊や
おんな好きな木綿豆腐ぼく苦手トマト坊や
帰りにはジャガイモ串揚げトマト坊や
似た街に似た月のありトマト坊や
この星の記憶やぼんたんあめの夢トマト坊や
蒲揺らしゆつくりと夜となるトマト坊や
茅花揺れまるで裸の町はずれトマト坊や
老菩薩腋にも足にも蓬生えトマト坊や
人が人を強いする峠トマト坊や
背むしの仔馬は言いましたトマト坊や
スポーツ店で気おくれしているトマト坊や
2〜3日見ないと思えば母死なんトマト坊や
アスファルト影跳び越えてトマト坊や
家燃えてすべて仮初トマト坊や
純潔という恥ずかしい宝物トマト坊や
皇帝の飛蝗の小判鮫の鳩トマト坊や

弔いの舟漕ぐ星のトマト坊や
釜茹での首のあい食むトマト坊や
ペランダに緑のカーテントマト坊や
休日に区役所に行くトマト坊や
顔のない海月の友のトマト坊や
牛耳ればどこまで見ゆる耳の宿トマト坊や
思わず少女に化けてみたトマト(少女)坊や
まだ青い女たらしやトマト坊や
八日目によく荷物がつてくるトマト坊や
予定より遅れて種まきトマト坊や
種を播く空飛ぶ空き地にトマト坊や
芽が出るか少し心配(少女)トマト坊や
苦汁を撒いてへらへらトマト坊や
早く芽がでろトマト坊や
虹の蛾の夢の如くに眠る日のトマト坊や
ずんずんとインドネシアが芽を出してトマト坊や
タイ産の悪霊タイ産トマト坊や
人狼の庭師鳩尾眺め居るトマト坊や
水晶に閉じ込められし子供かなトマト坊や

ポストまで生きて手を振る水無月のトマト坊や
まごうかたなくニッポンに箒のありてトマト坊や
すつぽんの鳴く夜にきみの寝顔かなトマト坊や
猫鳴いて藁ゆつくりと傾けりトマト坊や
納屋燃えて血の黄色かりトマト坊や
血の皿のうさぎそしてたくわんおばさんもト
マト坊や
イソちゃんが首縊るときトマト坊や
裏口でそつとベガス殺したるトマト坊や
満月の苦しまぎれやトマト坊や
怪物ジャーゴンが湯船でもがいているぞトマ
ト坊や
亡ききみとケイタイしてもいいかなあトマト坊や
湯船揺れお湯のかたちに人座るトマト坊や
でんでらりゅうばの野菜畑でまた会おうトマ
ト坊や

(未完)

寺岡良信

雨季はその最期に

やはらかな楚しよとをふるつた

潮騒と砂と

ハマナスの睡りに

群翔のカモメの喉の火傷

星屑が天空を覆ふと

琴座の入江にオールを忘れた

少年の漂流が始まる

天童大人プロデュース
プロジェクト La Voix des Poètes (詩人の聲)
——「目の言葉」から「耳のコトバ」へ——

Koe no yukue・Beni no yukue

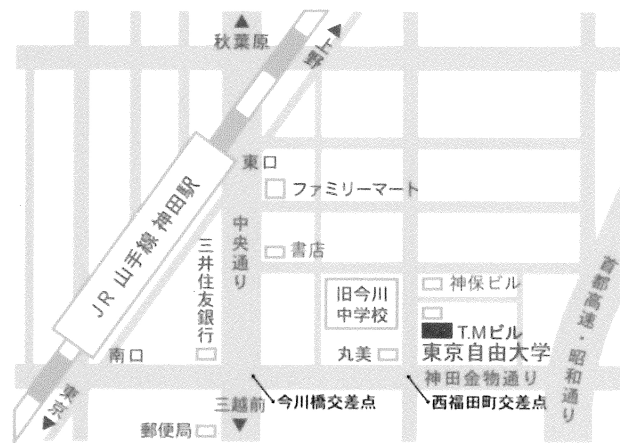
第795回《声のゆくえ・紅のゆくえ》(処女詩集『紅のゆくえ』を読む)
福田知子 Fukuda Tomoko

ひとの身体が樹木であるなら、わたしの声は洞(ほら)を辿る微動(ふるえ)のように、骨や筋肉や血管の間隙(みち)をとおって、他者に、宙(そら)にとどいてゆくのだろうか。詩語(ことば)は、目や脳髓だけでなく、神経や感覚のシナプスをいくつも通過して、ゆさぶりふるわせながら、新たな声の周波としてうまれかわり、これまでに見たことのない色やかたちの花を咲かせることができるのだろうか？

今回、初めて天童大人プロデュース“La Voix des Poètes (詩人の聲)”に参加いたします。「耳のコトバ」としての詩声を発語できるようになりたい……そのはじめの一歩です。変容してゆくはずの声を、多くの皆さまに聴き通していただけばうれしいです。

■プロフィール:1955年神戸生まれ。現在、京都市在住。詩集『紅のゆくえ』1985年、『猫ハ、海へ』1987年、『単体の空』2000年、詩画集『ハダカ螺旋』1999年、文学評論集『微熱の花びら——林美美子・尾崎翠・左川ちか』1990年、『詩的創造の水脈——北村透谷・金子筑水・圓頼三・竹中郁』2008年その他)

◇日時:2012年7月30日(月) 開場18:30 開演19:00
◇場所:NPO 法人東京自由大学 東京都千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2階



JR 神田駅 東口・南口 / 地下鉄 神田駅 / JR 新日本橋駅より徒歩5分

◇入場料: 予約/大人 2700円、当日/大人 3000円
学割: 1500円(学生証提示)、小・中学生: 無料(保護者同伴)
◇ご予約・お問い合わせ: 北十字舎 / Tendo Taijin Bureau
Tel: 03-5982-1834, Fax: 03-5982-1797, E-mail: tendotaijinbureau@mbi.nifty.com
Mobil: 090-3696-7098(天童)、090-6497-5030(岡野)

(先週から日本史の教育実習生が来ていて、私が指導教官を仰せつかっていました。実習生による授業が始まる前に、教官が「模範授業」を観せることになっていて、すでに二時間分の講義を済ませました。以下はその講義を採録したものです。テーマの設定や素材の構成、使用する言葉の選択など、実習生の参考になればと思います。文章化しました。よく河合塾や駿台予備校の講師が、「実況中継」と称する本を出していますが、これもそうした類の読み物です。高校生が学校でどのようなことを学んでいるか理解していただければ幸いです。)

1

金曜日から教育実習生の川田先生に、四時間にわたって授業をしていただきます。十七世紀中葉から十八世紀前半の、元禄時代を挟んでの文治政治の展開がその内容になります。川田先生にバトンタッチする前に、教科書の順序は逆になります。その時代背景を、その頃沸騰せんばつかりの勢いで社会を覆い尽くすに至った商品経済にほって、お話ししたいと思います。

皆さんよく知っている松尾芭蕉の話から始めましょう。芭蕉は元禄二年、西暦一六八九年の四十五歳のときに、弟子の曾良を伴って『奥の細道』の旅に出かけます。地図で旅程を確かめておきましょう。(地図配布) 江戸を出発して東北・北陸を回り、美濃の大垣に至るのがその旅程ですが、出羽では最上川を舟で下っています。出羽最上地方と言えば、赤の染料を取る紅花の一大特産地で、豪農・豪商が「徳川の平和」を謳歌していました。また北陸の日本海沿いは、今町(直江津)や高田など、西廻り海運に就航する北前船の出入りする湊や城下町が、これまた空前の賑わいを見せています。実はこういうところには、芭蕉の門弟が綺羅星のように居並び、芭蕉先生の指導を受けようと、心づくしの歓迎の宴を準備しているのです。芭蕉の旅は、「徳川の平和」がもたらした経済的繁栄を抜きには成り立ちません。では、こうした商品経済の繁栄をもたらした要因は何か。言うまでもなく、その基本は農業の発展です。

農業生産力の進展をもたらした要件を、順次挙げていきたいと思います。まず新田開発、これは三つの類型を憶えてください。

幕府官僚主導の ①代官見立新田

村が領主に願ひ出る ②村請新田

都市商人の資本による ③町人請負新田

このうち③は、徳川吉宗による奨励などもあって十八世紀以後に増えていきます。鴻池という酒造家が大坂にいて、両替商にも手を広げた商人ですが、この商人が拓いた鴻池新田は、今JRの学研都市線の駅名としても残っていますね。新田開発には、大がかりな灌漑施設を設けることが不可欠です。芦ノ湖を水源とする箱根用水、利根川を水源とする見沼代用水などが代表例です。新田開発は大きな成果をあげ、十七世紀の初めには約一六〇万町歩だった耕地面積が、十八世紀初めには約三〇〇万町歩にまで増えています。

さて大規模な灌漑工事を伴う新田開発は、幕藩権力や豪農・豪商による開発型農業と名付けることができますね。しかしその一方で、小農民による集約型農業と名付けるべき、農業技術の向上を目指す忍耐強い努力があるわけで、そこには、農具や肥料の発明・改良、農書の普及といったことが含まれます。

産地であり、家内工業を営む豪農や船問屋が栄え、北陸の各湊には、北前船の寄港を待つ豪商たちが、わが世の春を存分に愉しんでいました。繰り返しますが、それを可能にしたのは、新田開発もさることながら、より基層部分においては、個々の農民たちの営々たる努力と探求なのです。

2

前回、元禄期にさしかかるあたりから商品経済が鼎のごとく煮えだぎつていく様を、見ました。商品経済のこの波は農業だけではなく、他の分野の生産をも活気づかせてゆきます。

漁業では、干鰯やメバチなど金肥の需要が、九十九里浜(上総)のイワシ漁や松前のニシン漁を促しました。網漁はもともと上方の漁法で、それが全国に及んでゆきます。製塩業では、潮の干満を利用した入浜塩田が、瀬戸内を中心に広がります。

都市の発達材木の需要を急増させ、林業が盛んになります。木曾檜は尾張藩直営の溪谷から、秋田杉は秋田藩直営の山林から伐り出されたものです。

そして鉱業。十八世紀に入ると金銀の産出が激減してゆくのに対して、銅山の経営がその規模を増します。銅は生活貨幣である銭貨の材料ですし、長崎貿易における最大の輸出品の座を占めるようになります。三つの銅山を挙げておきましょう。

下野の足尾銅山、これは幕府の直轄です。明治期に古河家の経営になり、足尾銅毒事件を起こしました。

出羽の阿仁銅山、秋田藩の藩営ですが、これにはちよつぱり面白いエピソードがある。平賀源内という人を知っていますね。随分と器用な人でエレキテルの発明、油絵の制作、動植物の珍しい標本や見本を蒐めて江戸で博覧会をやったり、はては戯作から浄瑠璃の脚本まで書きました。この源内、鉱山の開発にも一家言あって、いろんな鉱山主から頼まれて鉱脈を探る仕事もしました。いわゆる「山師」です。さて秋田藩からの依頼で阿仁銅山に乗り込んだ源内、この秋田で絵の上手い青年武士に出会うのです。名は、小田野直武。源内好みのイケメン青年でもあったのでしょうか。餅の絵を描かせてみたら、これが素晴らしい。「おまえさん、こんな田舎でくすぶってる場合じゃないよ。江戸に来なよ。俺が保証するぜ」とか何とかうまいことを言って、江戸に連れ出した。こう言えはいかにも軽薄かつ無責任に聞こえますが、源内はこの小田野直武に実に大きな仕事をさせるのである。「解体新書」の解剖図担当。これで小田野は日本の洋学史に燦然と名を残すことになる。ちなみにこの小田野を通じて源内風の洋画が秋田藩に伝わり、秋田蘭園と呼ばれるようになります。

もう一つ、伊予の別子銅山。ここは大坂商人の住友家(屋号は泉屋)が開発し、経営にあたりました。住友は大正から昭和前期に、三井・三菱・安田と並んで四大財閥の一劃を占めますね。さて、話はここから佳境に入ります。手工業の分野に新たな生産様式が始まるのです。

手工業はまず都市部で発達しました。西陣織や伊丹・伏見・灘の酒などがそうですね。その手工業が農村でも興ってくる。最初は農家一軒一軒の手内職で、たとえば、おばあちゃんが古めかしい織機で綿織物を織るといった零細な農村内工業です。と

NO.042 寺岡良信

夜の調べに寄せて

今高校生が学んでいること

プリントの絵を見て下さい。備中鞆(深耕用)、千齒扱(脱穀用)、千石通し・唐箕(選別用)、踏車(灌漑用)など新しい農具が現れます。

肥料では、従来の刈藁や草木灰に加えて、都市近郊では下肥の使用が増えてきます。西宮市に名塩という地区がありますが、名塩村は江戸時代、西宮町(えべっさきの近くです)と契約を結んでいて、西宮の町民が排泄する糞尿を、金を払って汲み取らせてもらう。契約に基づくこの権利を「下掃除権」というのです。さらに干鰯・メバチ・油粕といった肥料が、綿作や菜種の栽培には欠かせないものとして登場してくる。これは村では自給できません。問屋や仲買から買入れるので、「金肥」と呼ばれました。

農書つまり農業の手引書が次々に出版され、活用されました。宮崎安貞の『農業全書』はその代表で、ロングセラーと言ってもよい。多種多様な作物の栽培法を、その兼用なんかも含めて記しているのがこの本の面白さで、余談になりますが、「ラッキョウは脳細胞を刺激するから受験生にはお薦め」とか「ニンニクをすり下ろして足の裏に塗れば鼻血が止まる」とか、面白いことがいろいろと書いてあります。中には詩的な文章もあって、先ほどの紅花で言えば、「又、出羽の最上にて、花を作る法あり、物をおほひをきて、少しねたる時餅には造らず、其まゝ亂れ花にして干上げ、箱に入れてくくなり」。つまり普通は水に漬けた花びらを取り上げてしばつたものを二三日置いたのち、手で練って餅の形にするのを、この地方では寝乱れた姿のまま日に干すのだというのです。イメージが美しく立ち昇ってくるような文章ですね。

すでに金肥のところで述べたように、木綿や菜種は商品作物つまり商業的農業の産物です。それは農業生産力が発達する中で、少しでも豊かな暮らしを求める農民たちの努力と知恵が生み出したものです。少々理屈っぽくなりますが、商業的農業が生み出されてくるメカニズムを説明します。

あなたがたは「百姓共は死なぬ様に生きぬ様にと合点いたし」(『昇平話話』)とか「百姓は財の余らぬ様に不足なき様に治むること、道なり」(『本佐録』)という言葉聞いたことがあるでしょう。これは農民の全余剩物を税として収奪しようとする為政者の農民観を示したものとされていますが、もし農民がこのような支配にいつまでも甘んじているとしたら、それは「奴隸的精神」であって、そこには人間としての進歩の証はないことになる。「面従腹背」という言葉がありますが、百姓一揆というドラマをおこなっていて、このグラフ(板書で図示)で示した剰余労働部分を少しでも多くしようとし、その一部を商業的農業に振り当てるのです。

それはまず、①商品としての米作りから始まります。そして商品であるからには、そこでは収穫時期や品質が問題となってくる。つまり米の商品化には、品種改良が伴うのです。

次の段階は、より有利な現金収入を目指して、木綿や菜種など、②商品作物の栽培が本格化します。干鰯の需要は、九十九里浜の地引網漁を発達させるなど、他の産業に影響を与えます。商品作物の栽培はそれぞれの風土と関係しますから、気候や土壌の性質を勘案しながら、駿河や山城宇治の茶、備後の蘭草など③特産物農業が各地に成立してきます。

冒頭で述べたように、芭蕉が『奥の細道』の旅でめぐった最上川流域は、紅花の特

ころが上野の桐生、下野の足利といった、背後に養蚕地帯を抱えた集落に、西陣あたりの高級な絹織物を織る技術が伝わり、都市の富裕な商人が問屋として乗り込んできて、社屋を構える。問屋は各農家に織機を貸し出し、材料の生糸を配って、機を織らせます。そして製品を買取り取る。これが問屋制家内工業と呼ばれるもので、分析的に言えば、問屋は農家に対して、その労働に見合った賃金を支払っているという関係になります。

(この関係を板書で図示)いいですか。封建社会の草深い農村のまっただなかに、資本家と労働者からなる資本主義的な生産様式が誕生したのです。私は大学時代、服部之総先生の著作がこのことを学び、体が痺れるような衝撃に捉われました。政治的に発達体制を潰したのには、尊王攘夷あがりの薩長の下級武士ですが、こうした商品生産の進捗と変化が、封建経済を、緩やかではあるけれども解体に導いていった。服部先生は他にも、興味深いことを言っておられて、桜田門外の変のテロリストたちに、資金を提供していたのが、「水戸コンニャク」を全国ブランドに仕立てた桜内という商人だったというのも、その一つです。

むろん商人と問屋がすべて、資本家に転化したわけではない。材木やミカンの投機的商法で巨万の富を得た紀伊国屋文左衛門などは、いわゆる「お大尽」として、あつというまに財産を馬鹿馬鹿しい遊興に蕩尽してしまうわけで、現実にはこのタイプの人が多かったでしょう。しかし問屋制家内工業さらにはマニファクチュアへと発展する、生産様式の進化が、社会をその深部において変えてゆくのだということは、どうかしつかり理解してください。

江戸時代、大量の物資を運んだのは、陸路よりも水運でした。江戶時代の、大量の物資を運んだのは、陸路よりも水運でした。阿利川の開削をおこなっています。

それから西廻り海運(西廻り航路)、東廻り海運(東廻り航路)を拓いた江戸の河村瑞賢。西廻り海運は東北地方の年貢や物産を、日本海回りで大坂に運び込む航路で、その射程は松前や蝦夷地まで伸びてゆきました。この航路に就航したのが北前船であることは、前回話しましたね。東廻り海運は太平洋に沿って、東北の物資を江戸に運ぶ航路です。そして大坂と江戸を結ぶのが、南海路。ここには菱垣廻船が就航し、のちには有力な対抗馬として樽廻船が登場してきます。

最後に流通組織すなわち商人の役割について、述べておきます。図式的に言えば、問屋→仲買→小売商人という経路で物は流通します。問屋が生産者から商品を仕入れる。それを仲買に卸す。仲買は小売商人にそれを売り、それが消費者の手に渡るのです。問屋と仲買は流通の要をにぎる有力商人ですから、自分たちの利益を独占的に守るための組合を作ります。それが「仲間」で、大坂の二十四組問屋、江戸の十組問屋はその代表です。彼らは菱垣廻船を独占的に利用できる。二十四組問屋が積荷問屋、十組問屋が荷受問屋ということになりますが、彼ら問屋連合は利益を独占するだけでなく、海難事故が発生した場合、被害額と保障額を分担する、保険組合という面も持っていました。

問屋は発達した商品経済の中核を担う、有力商人です。また商品の流通を媒介するものは貨幣ですから、商業においては、金融が主要な地位を占めてきます。その金融界に君臨したのが、両替商。その話は次回おこないます。

61-2012.06 大橋愛由等



歌ったのは、徳之島町亀津中区出身の時山實さん(75)写真である。時山さんは昭和11年生まれ。シマグチを完璧に話し聴

のしつうたを披露することも義務付けられている。今回の一切節の歌詞の中で私が注目したのは、「縁ぐわぬあるんたなや 夏水ぬ心／＼抜けば冬水ぬ雪ぬ心(歌意／＼縁は続いてほしいものだ。縁がある間は夏の水に接する時のようなやさしい心とされるが、縁が切れてしまうと心が冬水の雪のように冷たくなってしまう)。」

〈へなさけ〉がある 徳之島のシマウタ

の趣旨で発足した。また、唄者には、一切節以外にもう一曲徳之島オリジナル

奄美群島・徳之島の出身者は、神戸市長田区に多く住んでいる。

人の移動は文化の移動も伴う。徳之島の民謡シマウタを歌う唄者は長田周辺に集まり、主に出身者を構成員とする島唄教室も何カ所が存在し、盛んに活動している。

こうした徳之島出身者が長田で展開している日常的な文化活動を基層として、この島で歌い継がれている独自の民謡を歌う島唄大会が年に一回開催されている。

六月三日(日)、神戸市長田区の同市立地域人材支援センターで第五回徳之島一切節大会が開かれた。

同大会は、徳之島を代表するしつうたの一つで、歌詞が豊富な「一切節(ちゅつきやいぶし・ちゅつきやりぶし)」を、さまざまな唄者が歌うことで、出身者同士の親睦を図ろうと

くことができる世代だ。島の学校を卒業してしばらく黍、芋を植え、畜産牛など農業に従事していた。奄美は戦後米軍によって統治(1946-1953)されていたから日本本土には簡単に渡航できなかったのだ。この米軍政の時代は、敗戦によって本土や外地に行っていた島出身の青年たちが帰郷してそのまま島に残らざるをえなかったのだ。青年会活動が盛んとなり、若い男女による歌遊びも盛んだった。

時山さんがヤマトに出てきたのは、奄美が日本に復帰昭和28年して四年後の昭和32年。神戸市須磨区松野通に住む身内(叔母の甥)を頼ってやってきたのである。溶接工の資格を取り、三菱造船所や森下鉄工所などに勤務した。こうした職歴は戦後の奄美出身者の阪神における典型的な生き方のひとつと言ってもいいかもしれない。

シマウタは、自分を育ててくれた祖父の時山悦豊さんがシマのひとたちに教えていたほどだったので、小さい頃から耳馴染んでいた。徳之島のうたの魅力について「なさけがあり、働きの歌だ」とする。「島では、七倉建てる人よりも老親がいる人が良いと言われてるように親や先祖を大切にすることの大切さをシマウタでも伝えていきたい」と語る。これから歌い続けていきたい曲として島の「朝花節」をあげる。「朝花節」といっても、亀津朝花節、やつやつ朝花節(8歳と9歳の男女が仲良くなり周囲から叱咤されながら成長するさまを歌う、さたやま朝花節(砂糖づくりの過程を歌った)と多様だ。また口説アブラの慢女も魅力あふれる曲だ」。

時山さん自身15年前から「時山会」というしつうた教室を結成。徳之島ばかりではなく、沖縄の民謡も教え、三線の製作・修理も手がけている。

同大会に秋田県能代市からわざわざ参加したのは湊由美子さん(55)。徳之島の歌を知ったのは、同大会運営委員長(75)の米川宗夫さんが秋田で「ワイド節」を歌ったのがきっかけだった。「秋田も民謡が盛んだが、徳之島の民謡は明るさがある。出身者同士の心の絆を感じた」と盛んに拍手を送っていた。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.72

めらんじゅ

2012年06月17日 通巻72号

月刊『Mélange』編集部発行所

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

大橋愛由等 (『Mélange』同人)

Mobile 090-5069-1840

maroad@warp.or.jp

定価 500円 (税込)